

【一般演題3】 第15席

「王冰注にみえる『中誥』について」

宮城 浦山 久嗣

王冰はその『黄帝内経素問』注に多くの書を引用している。『中誥』は王冰注に引用される書目の一つであり、或いは『中誥』の2文字を含む書名の略とも考えられる。

王冰は、輸穴の基本資料となる所謂「明堂書」と目される書名を引用する場合には、単に「中誥」2文字で引用するか、或いは「中誥」2文字を含む書名で引用していることが多い。

書名と所出箇所は以下のとおりである。

- ①『中誥』：血気形志篇（24）、通評虚実論篇（28）
- ②『明堂中誥図経』：刺熱篇（32）2回
- ③『黄帝中誥図経』：刺瘡篇（36）2回
- ④『内経中誥流注図経』：刺腰痛篇（41）2回
- ⑤『中流注図経誥』：刺腰痛篇（41）2回
- ⑥『経脈流注孔穴図経』：気穴論篇（58）2回
- ⑦『中誥孔穴図経』：気府論篇（58）、水熱穴論篇（61）3回、繆刺論篇（63）
- ⑧『中誥図経』：骨空論篇（60）
- ⑨『孔穴図経』：繆刺論篇（63）
- ⑩『流注図経』：繆刺論篇（63）

これらの書名は、多くは「中誥」を含んでいて互いに似通っており、引用する内容も共通していると見て取れる。したがって、これらの書が同一の書名の略称、或いは言い換えである可能性が高い。これらの書名をつなぎ合わせれば、『黄帝内経明堂中誥経脈流注孔穴図経』という頗る長大な書名が成り立つこととなる。

王冰が全元起注『素問』に所謂「運氣七篇」を増補し、篇次を改変して新たに注釈を加えたのが762年である。この『中誥』は王冰が輸穴の資料として引用したのであるから、それ以前には通行していたものと考えなければならない。

本発表は、『黄帝内経明堂中誥経脈流注孔穴図経』という一書が存在していたものと仮定し、この「明堂書」の内容の類推を試みるものである。